

古文書を読む会学習記録

作成日 平成29年8月28日

開催日	平成29年8月24日	時間	10:00~12:00
場所	金沢公会堂リハーサル室	出席人数	16名
講師	真田 雅行氏	作成者	兒玉 仙三
テーマ	第二学習 艱難実録（箱館戦争）①		
概要	<p>・著者：通称は辻七郎左衛門。十五代将軍徳川慶喜の老中備中松山藩主板倉勝静の江戸詰家臣</p> <p>艱難実録 上</p> <p>I、序</p> <p>この艱難実録は、慶応4年戊辰正月、徳川家大坂より御上洛途中、伏見・鳥羽街道にて不意の戦争が起り、遂に大坂城を明け江戸へ帰城。その節閣老（板倉）が御供中の事ゆえ、随行して江戸へ。それから箱館迄流寓、のち東京へ帰り、遂に自訴された時まで、著者が目撃艱難経歴した実事を記す。依って、「艱難実録」と名付けた。故に、板倉公が日光から会津へ流寓中の事は目撃してないのでこれを記さず。</p> <p>この書を記した趣意は、板倉公の御心事・御艱難・御困苦、並に私がお供した艱苦・尽力したことを、後々に至り子孫も知らない事になるのは本意でない。子孫のために記したので、諸人に見せるを好まず。数十年後に人々に見せるかどうかは子孫の心に任す。</p> <p>明治二年己巳六月 下院重原邸待罪中に記す。 辻七郎左衛門/源忠貞</p> <p>II、附言</p> <p>我が君（板倉公）を世間では高名に評すが、実はさほどの事は無い。哀情深く、誠意余りあって、機権果断が足りない人。質朴簡便好み、詐偽修飾を憎む。依って、人に欺かれる事儘多し。しかし、斯と見込立候節は決して不動なり。全体守成の方に用いれば功あるが、創業大難の節に用いては功無し。惜しいかな、大難の時に閣老となったこと時運と雖も徳川家君臣の不幸と言うべき。</p> <p>予（辻）は20年来君側を離れず勤め、愚直にして偽飾せず。近習より監察・寺社役・側用人を歴て参政まで勤めた。この為、君公の為人を能く知る。爰に論じ置。</p> <p>公諱は勝静、字は君常、庫山と号す。官は侍従、位は従四位下、伊賀守。後、朝敵の名目を蒙り、官位取り上げらる。幕府の節、御奏者番寺社奉行、御老中両度の勤。</p> <p>III、艱難実録</p> <p>慶応4年戊辰年正月10日夜四時過に小子宅へ君公お越し、人私の上密談。大坂表戦争の事は勝利の趣に承知してたが敗軍。何れも驚く、何事が出来したのか？余人には弁じ難し。（これが書き出し） →以下は翌月に続く。</p>		
備考	資料：①登場人物解説・地図②箱館戦争（伊沢氏・逆説日本史の一部）③「五稜郭政府」解説文		
次回予定	平成29年9月14日 10:00~12:00 於：金沢公会堂リハーサル室 第一学習 宿村・森家文書 ②		